



警鐘

道州制の問題点を考える

— 新採用の県庁職員は何時まで働けるのか? —

ご案内の通り、現在進行している「平成の大合併」は残念ながら末端組織である市町村の意向から誕生した政策ではありません。

鐘や太鼓で無理やり合併を鼓舞し続けている総務省が事実上の発起人であることは一目瞭然でしょう。

全国で3300ヶ所の市町村の数は確かに多いでしょう。しかし、その合併を促す策として「交付税の削減」などを脅しの材料に「市町村行政の限界」を迫る手段は、正直、納得できる手法ではありませんでした。

一方、現在、総務省を中心に組織された「道州制ビジョン懇談会」は、その実施期日2018年として既に国を11、12の道州と300程度の基礎的自治体に分割し、更に夫々の役割を具体的に明示しているのです。例えば国が担当する分野は外交・安全保障・防衛など20項目とし、組織もまた今日の12省24庁を6省12局に改編するなど極めて具体的に描かれています。また道州の役割についても河川、道路、港湾、公害対策などを担当し、基礎自治体はこれまでの市町村が担ってきた福祉、学校、消防、戸籍など住民に密着した行政を受け持つこととなります。

先に記した「合併推進」と云いこの「道州制」といい、向かうところは日本の自治制度の改革であり、積年の目標である「チープガバメント」、即ち安上がりの政府であり、明解な行政を構築する

ところにあります。

確かにビジョン懇談会が指摘するように、今日の行政機構は「屋上屋を架す」の譬えに似て、無駄なシステムが余りにも多いことは誰もが認めることであります。

だからと云って懇談会が意図するような、恰も快刀乱麻を断つが如き行政改革は、同時に大きな歪みを齎すものと考えます。一例として人事を考えた場合、懇談会は省庁を半減することによって余剰となってくる国家公務員については11、12の道州に振り分ける方針であると言います。しかし、道州の業務を担当する者は本来、各県の職員がそのまま継承することになるでしょうから、国からの配置転換を受け入れる余地は全くないところがあります。第一、今の県庁職員の処遇をどう考えるのか、恐らく数県が合併して誕生する「州」の役所が必要とする職員数は半分以上に削減される以上、国からの職員を受け入れる余地は全くありません。更には末端組織である「基礎自治体」は誰が担当するのか、その末端自治体も計画では僅か300に圧縮するとすれば、確かに「云うところのチープガバメント」でしょうが、公務員の大首切りなくして納まる数字ではありません。

因みに、現在の公務員数ですが、国家公務員(特定独立行政法人を含む)は96万人(うち自衛官が25万人)であり、また地方公務員は316万人とのことであります。凡そ400万人の公務員の処

遇を第一に考えずに勝手に描くこの企画に一抹の疑問を払拭することが出来ません。

嘗て私は県議会の一般質問の中で、それまでの県の幹部職員の退職年齢について、公務員法にある通り60歳まで幹部職員といえ勤め上げるべきと指摘、石川知事もまたこの趣旨を認め、対応する旨約束したものの完結するまでには10年近い歳月を要したことを考えれば「道州制ビジョン懇談会」の趣旨が実現するには「第二の大政奉還」と云った極限状況が必要であると考えるのであります。

一寸一言

私の雑記帳から

「ぼたもち」と「おはぎ」の違い

春から初夏に作られる小豆餡をまぶして作られたお饅頭を「ぼたもち」と呼んでいます。これを漢字で表すと「牡丹餅」と書きます。丁度この時期には「牡丹」の花が咲きます、赤い餡にまぶされた饅頭は恰も、「牡丹の花」に見えるところから「ぼたもち」と名付けられたのであります。

一方、秋の月見には、昔は必ず「おはぎ」が備えられておりました。しかし「おはぎ」の姿形は「牡丹餅」となら変わりません。「ぼたもち」も「おはぎ」も同じものなのであります。牡丹餅が牡丹の花が咲く頃のお饅頭の呼称であれば、萩の花の咲く頃に出されるものであれば、「おはぎ」の名も納得されるでしょう。

小黒と小鹿の命名の由来

小黒の地名の由来については定かではありませんが、その昔、常陸の国（現在の茨城県）小栗荘に「小栗」と名乗る判官がいたと云う。或る時、彼は足の疾患に困り果て、現在の「小黒」に湧出していた霊泉を訪ね、浴したところ、忽ち快癒して故郷に帰ったという。即ちこの「小栗」が訛って「小黒」になったと物の本に書かれています。また近くにはこの小栗判官が掘った井戸があつたとも伝えられております。

一方、「駿河国新風土記」には往古の「小粉御厨」が転化したものではないかと書かれておりますが、「御厨」は神社の一部ですが「小粉」とは何のことか私には解りません。

処で、小黒には宝永4年の富士山の大噴火と共に湧き出した「富士井戸」と呼ばれる温泉があつたとの事、しかもその効能は万病に効くといわれ、明治の末期、この鉱泉で温泉を営業していた人がいたとのことです。

次に小鹿について室町時代、駿河の国主であつた今川範政の三男範頼がこの地に住まいし小鹿氏を名乗っていました。

1476年、今川の6代目の義忠が遠州塩見坂で農民の夜襲に倒れ、ここに今川家の激しい家督争いが始まったのであります。

範頼の子小鹿範満と義忠の継子竜丸の争いは今川の存亡に関わる厳しい対立でしたが、その後伊勢新九郎が仲立ちとなって、竜丸

共に不可思議な地名

が成人するまでは範満を後見役とすることで一件落着いたのであります。

しかし、10年後、竜丸が元服した後も職責を譲らぬ範満は伊勢新九郎によつて倒され、ここに小鹿氏は消滅したのであります。

さて、伊勢新九郎、のちの北条早雲はこの

時突如歴史の表舞台に飛び出してきましたが、その素性については長い間謎とされてきましたが、今では義忠の夫人・北川殿の兄と位置づけられております。

『天野進吾』の歴史講座
町内会の集会、サークル活動などに天野進吾を呼んでみませんか。大変ありがたいことにこのSHINGO・SCOPEの郷土史が好評を頂いております。どうぞ、お気軽にお声掛けください。

静岡空港の開港に当たつて 静岡ゆかりの

浮田幸吉を売り出す

来々月3月、県民の厳しい眼差しの中、愈々一番機が飛行するところとなりました。

さて、ご存知の方も多かろうと存じますが日本人で飛行機の発明に奔走した男たちと云えば浮田幸吉、平賀源内、二宮忠八の三人が上げられます。

平賀源内は江戸中期の科学者、「エレキテル」の言葉でお馴染みの人物です、また二宮忠八は明治24年、ゴムを動力にした模型飛行機を試作し、飛行時間5分の記録をつくりました。

この二人は「広辞苑」にもその名と業績が記されていますが、残念ながら本市ゆかりの「浮田幸吉」の名前は分厚い人名辞典でなければ見出すことはできません。

12月議会の企画・空港委員会において、私

は4月に発行したShingo — Scopeの郷土史「日本人で最初に空を飛んだ男 浮田幸吉」のコピーを出席委員に配布した上で、予定される開港イベントに是非とも「浮田幸吉」を顕彰する企画を考へては如何と力説しました。

もとより委員会に出席していた殆どの職員や議員は浮田幸吉の名前も初めて聞く話・・・磐田の大見寺の天井にはお墓はもとより、浮田が初めて飛行したと言われる二分の一に縮小した飛行機が吊り下げられていること、また以前から磐田市では祭りに「浮田幸吉」が引き出され、市民の認知度も高く、更に安倍

川の河川敷で初めて空を飛ぶ事に成功した事実を紹介、委員の誰もが浮田幸吉に関心を持つと共に、空港の完成式典に相応しい企画とお世辞を戴いたところでした。

勿論、当局にとつて全く予期していない提

案であり、時間的制約もあり、大々的なイベントとしては何時ものことから乗り気は見えてきませんが、本市に深い因縁を持つ浮田幸吉をこの際、大きく売り出していきたいと目論んでいるところであります。

幸い、静岡朝日テレビがこの企画に関心をもっていただき、3月末には県内ニュースとして放送、更に「浮田幸吉」をクローズアップすべく「出生地」の岡山に飛んで取材するとの熱の入れようです。

世界で最初の滑走路として安倍川の河川敷を「ギネス」に登録させることも夢があつていいでしょう。

